

子どもの睡眠と情緒・行動上の問題に関する研究： 一般児童および被虐待児のデータを用いた検討

岡田, 真一

<https://hdl.handle.net/2324/1931977>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	岡田 真一 (おかだ まさかず)			
論文名	子どもの睡眠と情緒・行動上の問題に関する研究：一般児童および被虐待児のデータを用いた検討			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	樋口 重和
	副査	九州大学	教授	綿貫 茂喜
	副査	福岡女子大学	教授	森田 健

論文審査の結果の要旨

本論文は、一般児童と被虐待児の睡眠と情動・行動上の問題との関連性を質問紙調査によって明らかにしたものである。本論文は五章で構成されていた。第一章では、本研究の背景として、日本人の子どもの睡眠時間が短いことが述べられていた。さらに、小児の睡眠習慣は年齢やメンタルヘルスに大きく影響を受けること、また、就床時、睡眠中、起床時、日中における睡眠に関連する問題や睡眠障害は、メンタルヘルス問題や精神疾患のリスク要因となるだけでなく、精神疾患発症の脆弱性にも関与していることが示されていた。以上のことから、本研究の社会的及び学術的な意義が確認された。

第二章では、就学児童の睡眠習慣の問題および睡眠障害の判別を目的とした簡便な質問票の開発が試みられており、適切な方法で簡易版の質問紙の信頼性と妥当性についての検証が行われていた。その結果著者らが開発した簡易子ども睡眠質問票により、学童期の子どもにおける睡眠問題を簡便かつ適切に判別し、早期に検出することが期待できる結果が示されていた。

第三章では、日本の小学校・中学校に通う約2万人の一般児童を対象に、簡易子ども睡眠質問紙を用いて、睡眠と情緒・行動上の問題の関係について調査が行われていた。その結果、小学校高学年から中学生において就床時刻の遅延がより進んでおり、低学年では生活リズムと睡眠タイミングのミスマッチングから睡眠不足が生じている実態が明らかとなった。また、全体の約2割弱の子どもに何らかの睡眠障害の存在が疑われ、情緒面、行為面、多動性・不注意の問題をもつ子どもでは、睡眠問題との関連性が強いことが示されていた。

第四章では、日本の社会的養護施設に入所している被虐待児を対象に、簡易子ども睡眠質問紙を用いた睡眠習慣の問題および睡眠障害の頻度を調べられていた。被虐待児の約4割が就床時や起床時に睡眠関連症状を抱えていることが明らかにされていた。情緒・行動上の問題を抱える被虐待児では睡眠障害の頻度が有意に高く、特に反社会的行動傾向、抑うつ傾向を有する被虐待児では睡眠障害の頻度が高いことも示されていた。

本論文は子どもの情動が睡眠とどのような関係があるかを、日本人を対象に行った研究である。実験のオリジナリティも認め有れ、一連の調査から得られた結果は、子どもの感性にかかわる研究分野に重要な知見を追加するものであると判断された。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、平成 30 年 2 月 19 日 14 時 30 分から九州大学大橋キャンパス 5 号館 512 教室において、岡田真一氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。論文内容について、岡田真一氏は論文調査委員（全員）の質問に的確にかつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったことから、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。以上のことから、論文調査委員会は、岡田真一氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。